



Title	キヤケゴーアとドン・キホーテ : 新発見のキヤケゴーア諷刺画に関する論争
Author(s)	大谷, 長
Citation	大阪外国語大学学報. 1958, 6, p. 165-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80143
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キヤケゴーアとドン・キホーテ

——新発見のキヤケゴーア 諷刺画に関する論争——

大 谷 長

Kierkegaard og Don Quijote

——Om diskussionen angående den nyfundne
karikaturtegning af Kierkegaard——

af Masaru Otani

O V E R S I G T

Essayet, som jeg her præsenterer for den japanske læseverden under titlen Kierkegaard og Don Quijote, behandler den berømte diskussion, eller rettere samtale, mellem pastor Hjerl-Hansen på den ene side og prof. Frithiof Brandt på den anden, om en tegning af Wilhelm Marstrand formentlig forestillende Søren Kierkegaard til hest som Don Quijote, offentliggjort for første gang af pastor Hjerl-Hansen for otte år siden. Der er jo mange områder indenfor Kierkegaard-forskningen, men det nærværende er så specifikt, at man hidtil ikke har kunnet ane noget derom her i landet.

Da to mennesker, som efter Rikard Magnussens død nu er de førende eksperter på dette område, drøftede det med hinanden på den fineste og smukkeste måde, var det naturligvis spændende og interessant at følge dem for de danske læsere. Man kan ikke lade være med at beundre to eksperters virtuositet efterhånden som de belyser enkelte dybe betydninger i denne gådefulde tegnings hemmeligheder, idet de støtter sig til en frodig fantasi og den mest gennemtrængende sporsans.

Medens diskussionen bølger frem og tilbage mellem de to dygtige debattøren, idet de skiftevis hævder synspunkter og indrømmer synspunkter, bliver forskellige problemer udførligt eftersat og alle overvejelsesværdige punkter grundigt belyst, og endelig når undersøgelsen til sit højdepunkt, det vigtigste spørgsmål: Hvorfor har Marstrand fremstillet Kierkegaard som Don Quijote?

Prof. Brandt udfoldede her sin specielle evne og lagde sit dybe kendskab til Kierkegaard for dagen, medens på den anden side pastor Hjerl-Hansen, med sin udmærkede indfølelse og iver i granskningen efter det kostelige materiale, bandede sig vej til sagens kerne.

Man kan godt sige, at den her åbenbarede måde at drøfte tingene på, er en illustration af danskernes humoristiske sans, men samtidig er det et værdifuldt bidrag til Kierkegaard-forskningen, som kun kan tænkes ydet af danskere.

Jeg har aldrig før set så interessant en samtale som denne.

以下に述べるのは、キヤケゴーアがその著作や日誌の中でドン・キホーテに就て書いた事を主題として取扱うのではなくて、ボェャウエ・ヒエール-ハンセン (Børge Hjerl-Hansen) 氏が数年前新たに発表した所の、ドン・キホーテとして示されたキヤケゴーアの諷刺画に関するものである。

さて、キヤケゴーア研究にも色々の方向があるので、ここに述べるのもその特殊な一つである。キヤケゴーアが、著作家として永遠に記憶されるために、自ら、疲れを知らぬ創作をなし、且つ考へ得るあらゆる秘術を傾けたのと対照的に、彼がその現世的な生存の痕跡を、病的なまでに嫌って抹殺しようと骨折った事が知られている。今日我々は ホー・セー・アナーセン (H. C. Andersen) の写真を持っているし、彼は専門の肖像画家の前に自ら進んで立ったのである。然しキヤケゴーアは、その兄ペーターの言葉を俟つまでもなく、彼が絵に画かれる事を欲しなかった事は、事実が示しているのであって、今日彼の正規な肖像画と言われるものが残されて居らず、近親者の倉皇たるスケッチや、同時代者の瞬間網膜像の再現や、彼の死後での記憶による描出があるばかりである (唯一の例外、「彼の肖像画を持つ事を許された唯一人の者」たる Julie Tomsen が製作せしめた石膏浮彫りが、奇しくもアメリカに於けるキヤケゴーア研究の第一人者たるウォルター・ラウリー (Walter Lowrie) の所持する所となって居り、1955年3月ラウリーが大病のために死に瀕した時、この石膏像に就ての詳細な顛末を知らしめられた彼に親近な4人の内の1人として、筆者は時期が来た時之に就て述べる責めを負っている)。だから我々は、この今日誠に有名な思想家の容貌を、正確には殆んど知らないのである。それだけに一層、彼を眼のあたりに見た同時代の芸術家の筆になる彼の描写が、今や非常な熱意と熱狂を以て探し求められ、画面にほんの微かな類似を示すものでも、或はキヤケゴーアを推測させる僅かの暗示を含むものでも、大きなセンセーションを以てその発見が告げられるのが常である。

そして、この方面の鑑識家として著名なのは、ボェャウエ・ヒエール-ハンセン牧師である(彼

の事は「キヤケゴーア記念展覧会」に就ての筆者の別の論文で述べたが、彼とは百年祭国際会議以来の知り合いであり、後に Sorgenfri にある彼の美しい自宅に招待してくれて、キヤケゴーアの種々の遺品や彼の所蔵する色々の肖像、特に又、これも最近発見のレギーネ・オルセンの肖像など、こちらが緊張して眼が眩むような品々を列べ出して見せてくれた。筆者が5月の或る日 Esperance Allé 6 の彼の事務所を訪れた時、ここでも彼は数枚の Wilhelm Marstrand (1810—1873. マールスドランはデンマークの著名な画家。Karl Madsen は彼の総合的な伝記を書いている。彼によればマールスドランはデンマーク第一の画家とされる) の筆になる最近発見のキヤケゴーアの絵を見せてくれた。これらの絵に筆者はいたく興味を引起された。そしてその内の1枚がこれから述べようとする「ドン・キホーテとしてのソェーヤン・キヤケゴーア」(Søren Kierkegaard som Don Quijote) であり、この絵がヒエール・ハンセン牧師によって数年前発表された当時、Ekstrabladet 紙上に於て、一流のキヤケゴーア研究家たる Frithiof Brandt 教授との間に、この絵を挟んで論争が展開された事も知った。

キヤケゴーアの外貌に就て詳細な研究をした Rikard Magnussen の死後、この領域での最も優れたエキスパートたる右の兩人が、その粋を尽して論議を交えたのだから、当時之を読む者が手に汗を握ったのも無理はない。両者の最も鋭敏な勘と隅々にまで行きわたる豊かな空想力に支えられて、この謎のような絵の秘密の中に、一つ一つ深い意味が明されて行く手練の技には、感嘆の外はないが、両者が、互に認むべきは認め、主張すべきは主張しつつ、論議を重ねる内に、色々の問題が微細に検討されて行つて、当然考えらるべき肝要な点は全て遺漏なく反省される事が出来、最後に、最も枢要な問題たる「マールスドランが何故キヤケゴーアをドン・キホーテとして描出したか？」に就ての示唆する所多い考察に及ぶのである。以下に於て筆者は、両者の論述を整理しつつ興味深い論点に焦点を合せて、その概要を述べて見たいと思う。



ヒエール・ハンセン氏が1949年夏に、 Charlottenlund の Hartmannsvej に住む F. C. Boldsen 氏方で見出したこの絵は、枠を除くと、ペンで画かれたこの絵自体の寸法は10×16cmであり、そして、薄い淡褐色の厚紙に貼りつけられて居て、絵の書かれた紙の四辺に沿ってインディアン・インクで2本の線が引かれてある、外側の1本は細く、内側の1本は太くに。

所がこの貼りつけられた厚紙といい、インディアンインクの2本の線といい、それは同じくヒエール・ハンセン氏が1年前にTaarbækのPoul Gamrath 牧師のもとで見出した同じマールスドラン筆のキャケゴーアの全身像の小さい絵の場合と全く同じなのであった。マールスドラン自身が、自分の書いた絵に就ての取扱いがぞんざいで、絵の周囲に枠線を入れたりする体裁はやらなかった以上、右の二つの絵は嘗て同一の所有者のものであった事が明かである。そしてこの事情は、ヒエール・ハンセン氏が更に今度のBoldsen肖像画の出所を調べる事によって、一層明白になった。というのは、ボルセン氏は数年前それを競売で190 クローナーで買ったのだが、競売目録によってそれがオーアプスの美術商 H. Sivelykke から出たものなる事が分った。早速シーベリ



ュッゲに照会された所、どこから得たかを憶えていなかったが、個人の家庭からであったに違いないという事と、多数を一緒に一箱で買い取ったという事を知らせたのだった。調査はそれ以上進まなかった。ヒエール・ハンセン氏はここで、真正レンブラントの発見に纏わる「君達はひよっとするとレンブラントの上に寝ているのじゃないか？」の言葉（ベッドのスプリングの上に板を敷くのは普通に人のやる所である）を想起せしめている。

トーアベック (Taarbæk) 肖像画の方が、マールスドランの真作なる事が決定的であった如く、今度のボルセン (Bolsen) 諷刺画に就ても又、国立美術館の専門家達の間でその真作である事に意見の一致を見た。然しこの絵の裏書きの「ドン・キホーテとしてのソエーヤン・キャケゴーア」が、何らかの権威者に由来する鑑定のものかどうかを決める事は出来なかった。それで、この絵が右手に風車小屋を持つ事によって、人物がドン・キホーテを表わすかもしれぬとして、それが同時にキャケゴーアを示すとするためには、理由が挙げられねばならない。実際、馬に乗っている人物の首を、ヒエール・ハンセン氏は最初（ブラント教授の補足的論証のあるまでは）その規模の大き過ぎるコンドルのような鼻や、傾斜した額と、殆んど垂直の顎先を持った下顎部などのため、キャケゴーアの首であるとは考えなかったのである（そして彼のその考えは、同氏がマールスドラン文庫の中でマールスドランの画いたドン・キホーテの諧謔的スケッチ中に、今度の諷刺画の人物の首と納得の行く類似を示すものを見出した事によって、一層強められたのであった）。だから彼は、「マールスドランはキャケゴーアの身体にドン・キホーテの首を載せた」としたのであった。然し人物の胴体と手足に就ては、それが全ての源^{まこ}拠と合致する紛う方ないキャ

ケゴーアの特徴を示すとする、即ち、華奢な身体の作り、長い細い足、丸い背、胴着付きの上衣、そして例の有名なタイトなズボン、などである。

ヒエール・ハンセン氏が最初人物の全体にキャケゴーアを見取る事が出来なかった理由の一つは、キャケゴーアと乗馬との関係に就ての知識が彼には不十分であった事からも来たと思われる。彼はキャケゴーアが乗馬を練習しなかったものと考え、彼の生涯に於ける馬とは、コンゲバイエンから、グリープスゴウへと彼の車を引張った所の馬車に繋がれた馬のみの事だったとした（この点もブラント教授によって訂正された）が、之に反してセルバンテスの小説に於ける気の毒な騎手は練達の騎士であり、しかもその馬は痩せ馬である。そしてこの絵で画かれている馬は速歩ダービーのトゥレイニングをしているような純粋なスタイルで走っている。それはスペインの痩せ馬のむさくるしい鬣を持っているが、然し又突進する歩調を持っている。だからそれは「ロシナンテとペガソスとの意識的な混合」だとヒエール・ハンセン氏はしたのである。

然しこの絵がキャケゴーアを表わすものだという証拠を示すために、ヒエール・ハンセン氏はここで天才的な想像力を発揮するのである。それは同氏に取って、マールスドラン自身の「慎重であると共に機智あるやり方でする指示を含む」と思われるものなのである。絵に於て、馬の鼻孔の丁度右に、小さいかすかに曲った線がある。馬の解剖学も馬の頭巾も、このしるしとは合致させる事が出来ない故に、それは馬匹学の内での奇形とされざるを得ない事になる。だから、唯一つの説明だけが残る。つまり、ここにはSという文字があるのだ。そのSに附いている小点はピリオドである。マールスドランは、キャケゴーアの名のイニシアルS.をこれで暗示したので、と。さてこのような小観察をやった後で、次の課題は、出来ればこの特殊なモザイク画像の中に、完結的な石を置けるように、苗字のイニシアルを発見しようとする事である。そしてそれは、風車の翼の形の中に発見出来るのである。この絵に画かれているような風車の状態に於て、一度に4つの翼全体に対するパースペクティヴな位置を取る事は現実として不可能である。画家が然しともかくそれをやっているのだから、ここには特別な意図を動機とする技巧的な何かがある筈だ。マールスドランはキャケゴーアの苗字をここに忍び込ませようとして、風車の翼の形のXを、出来る限りKの方向へ引張ろうとしているのだ。

次で、ヒエール・ハンセン氏はこの絵に対して「心理的一歴史的」側面からの考察をなす事によって、この絵の画かれた時期と共にその作画の動機を探ろうとする。氏の理解する所によれば、この顕著な諷刺画は、今までに知られているマールスドランの筆になるキャケゴーア肖像画（それらは皆、記憶による回想画である）とは反対に、キャケゴーアの教会襲撃の頃の生時、恐らく彼の最後の悲劇的一劇的な年たる1855年の前、に画かれたものと考えられる。そしてそのような

仮定をなす事によって初めて、この驚くべき謎の画は、動機づけを得る事になる。即ち、マールスドランは一面に於て、この殉教者一哲学者の運命に対して大きな畏敬の念を有していたので、ジャーナリストや諷刺画家達によって永い間死ぬ程の苦痛を嘗めさせられたこの特異な人間に就て描いたむき出しの諷刺画の人物に、首までもキヤケゴーアのものを据える事によって、それを明かにキヤケゴーアとして示す事は出来なかったが、他面、マールスドランは普通の物の考え方をする教会人として、キヤケゴーアの国民教会に対する突撃をば、半ば狂った熱狂家の風車小屋に対する悲喜劇的な闘争と考えるコペンハーゲン知識階級の大多数の意見を分け持っていた事は確かである。この心理的な二重の立場が、この画家をして、怒りと諧謔が意識的に表現されている作品の表出へと反動的に駆ったのであり、かくして、「狂えるスペイン人と天才的デンマーク人の技巧的中間項」(en artistisk mellemproportional mellem den gale spanier og den ganiiale dansker)としてこの絵が現れ出たのである。

右の如きが、ヒエール・ハンセン氏が新発見の「ドン・キホーテとしてのソーヤン・キヤケゴーア」を発表した論文の要点である。之によって非常な興味を憶えたフリチオフ・ブラント教授は、同じ紙面を借りて、ヒエール・ハンセン氏への書簡の形式で彼の意見を述べ、幾つかの積極的な解明を提示して、さすがに彼の広く深い知識を駆使して問題に対して有意義な若干の考察をなすのである。

ブラント教授は先づ騎手としてのキヤケゴーアに就て述べる。ヒエール・ハンセン氏の考えでは、マールスドランが馬に乗ったキヤケゴーアを描いたものとするなら、それはただ、マールスドランが風車小屋の記入から分るドン・キホーテ・モチーフを利用したという事からのみ、理解出来る事となる。所がそれは誤りで、キヤケゴーアは30歳頃に或る期間実際に馬に乗ったのである。その証拠はハンス・ブロークナー(Hans Brøchner)の記述である。彼は『ソーヤン・キヤケゴーアの思い出』(1877年)の中で、キヤケゴーアが乗馬を練習して、騎乗して行くのを見たが、彼は馬の上では決していい恰好ではなかった、ぎこちなく乗かって、常に馬術教師の教えを想い出しているような印象を受けた、と書いている。ブラント教授はその他キヤケゴーアの書いたものの中にも彼が馬術を知っていた事を想像させる箇所があるとして、一例として1844年の『序言』の中で、序言を書くという事を色々形容しているくだりで、それは「恰かも、左の脚を平らにつけ、右手に手綱を引締め、跑足の馬がシュツと言うのを聞き、そして自分は皆んなくたばってしまえと思うようなものだ。」(S. V. V 7)を挙げ、この文章にインスパイヤーされて「コルサール」の画家 Klæstrup は、1846年1月16日に「コルサール」は出た「馬に乗った

「キヤケゴーア」の諷刺画を書いた事をも附加えた。が、ともかくこれで、マールスドランが彼の絵によってキヤケゴーアを考えていたという可能性が強められた。マールスドランは、ブロエクナーと同様、キヤケゴーアが馬に乗っているのを見たか、或は、『序言』への指示を伴ったクレスドルップの絵を見たか、或は、彼自身『序言』を読んだか、或は、キヤケゴーアが実際に馬の乗り手だという事を他人から聞き知ったか、のどれかの可能性がある事になる。けれども、ブロエクナーの報告はマールスドランには知られなかった。マールスドランは1873年に死んだのだから。

次に、巧妙なイニシアルに就てだが、キヤケゴーアのイニシアルがこの絵の中に忍び込ませてあるのを明白に証明出来るなら、マールスドランがこの絵でキヤケゴーアを考えた事が確実になるとブラント教授が考えるのは、ヒエール-ハンセン氏と同じだが、哲学科主任教授としては、側を見る眼も面白い程に、このクロスワードパズルに教授は熱中するのである。筆者はコペンハーゲンでいやと言う程出くわした事だが、日本で二昔も前の戦前に熱狂的に流行したクロスワードパズル（現在はクイズとかボナンザグラフというのだそうだが、熱狂の仕方が違う）が、今そのままに大流行で、家庭の中でも電車の中でも、老若男女が新聞の裏一面に刷り込んである大がかりなこれに夢中になっているのを見たが、生活の余裕と安楽さという点で、今のデンマークは二昔^{ふたむかし}以前の日本に丁度合っているのかもしれない。だから、哲学教授が之に夢中になってもいいのかもしれない。で、先ずイニシアルKに就てだが、風車の翼の中にKを見る点で、ブラント教授はヒエール-ハンセン氏の想像的解釈に同意を表明して、マールスドランが意識的な技巧的気儘によって風車翼のXを出来るだけ長くKの方へ引っぱったとするヒエール-ハンセン氏の「天才的な解釈の試みの魅力」に引きつけられるのである。ただ風車小屋に対する見方に就ては、ヒエール-ハンセン氏がパースペクティブな面で画かれたとしたのに対して、ブラント教授は、それが正面平行面に於て、つまり、観察者が翼に対して垂直に見るような仕方、画かれてあるものとする。尤もそのように見ても、四つの長方形をなして相互に取付けられてある翼は、この絵に画かれてあるようには見えるものでない事は認められているのである。

所がブラント教授は熱心のあまり、更に大胆に想像の翼を延ばすのである。風車小屋のすぐ右に、宙に浮かんだ1本の線がある。これは、左の風車翼として下方に延びている所の上方の右風車翼と平行になっている。この平行の線は、この絵の中で何の働きも持っていないから「意味」がない。それは、勿論、「偶然の」一触か、画かれなかった何かの初めであると考えられる事はあるかもしれぬが、更に、この宙に浮かんだ意味のない線の少し上方、しかもこの線の丁度延長上に、意味のない一点がある。この意味のない線と意味のない点は、iと考えらるべきではないか？

もしそうだとするなら、単にKのみならず、Kiがこの絵の中に隠されている事になる。

ではSに関してはどうかと言うに、Sに就てはブラント教授の意見は違うのである。彼は、ヒエール-ハンセン氏が馬の鼻孔の右に見出したSに納得しないで、この「小さいかすかに曲った線」は單純に鼻孔の輪郭であり、もっと正確に言えば、馬に於て常に非常に明瞭に見られる鼻翼の輪郭であるとし、もしもこの線がSとして役立つべきなら、Sが寧ろ背を低くするのが、当然ありそうな事だと述べるのである。そしてその代りに、彼は風車の中にSを見ようとするのである。左手の低い方の翼に続いている所の右手の高い方の風車翼をよく見ると、高い右手の翼の左側の輪郭をなしている線は下の左手の翼の右側の輪郭に続いていて、翼が画かれている他の線とは違って1本の線であり（つまり、他の線は中央で二つに分割されている）、強いて言えば、長く延ばされたSと解釈出来る。ここに鼻翼は変じて忽ち車翼となる奇蹟が起る。読者は呆氣に取られ、奇術忍術も顔負けの体である。で、もしそうだとすれば、風車翼が全体としてキャケゴーアのイニシアルSKの組み合わされた形をなして居り、このモノグラムが更にiによって続かれているのだから、SKiがそこにある事になる。細工は隆々かくの如しだ。だが、このような解釈は、何か意味があるかもしれぬが、又全くの幻想かもしれぬのであって、その不確実さと曖昧さのために、何もその上には建てられないものだ、という事を附け加える用心深さをブラント教授は勿論示している。マールスドランが、彼の他の絵に於ても、イニシアル乃至は更に一般的に言って文学的諸因子を、忍び込ませた事があるかどうか。又、もしそんな場合に彼がどのようにやったか、を調査する事が、寧ろ重要な課題として残るであろう、と。そしてこの事は後にヒエール-ハンセン氏によって調査された結果、多くの専門家達は皆単にマールスドランに於てのみならず、デンマークの他の大芸術家達に於ても、何らかそのような前例があったという事を記憶していないという点で一致を見ている。

さて次に主要点たる騎手の姿に就てだが、之をヒエール-ハンセン氏は前述の如く、身体と首に別々にしているのである。ブラント教授は之を、謂わば一つのものに継ぎ合わすのである。先ず身体の方に関しては、ヒエール-ハンセン氏の言葉に全く同意見である旨を述べる。つまり、長い細い足や丸い猫背は、充分証明されたキャケゴーアの特徴を示しているものである。然し、首に関しては、ヒエール-ハンセン氏の意見は、前述の如く、この諷刺画の人物の横顔はキャケゴーアとは似てもつかぬものだから、マールスドランはドン・キホーテの首をキャケゴーアの身体の上に載せた、というのであった。然し、ブラント教授によれば、この首がキャケゴーアに似ているという事は、今日我々が漸次かなりの確実性を以て認める事が出来るものなのである。マールスドランは30箇前後のキャケゴーアに就てのスケッチを描いている。その主要グループをな

すのは、マールスドランが彼の友人でキヤケゴーアの敬慕者である Johannes Fibiger への書簡箋の1枚に描いたもので、1870年だから、キヤケゴーアの死後15年しての回想画である。所がこの書簡箋は、どういうわけか二つに裂かれたのである。その片方はフレゼリクス博物館が今日所蔵して居り、他の片方は、もうずっと以前に失われたと信ぜられていた所が、Mogens Müllertz 氏が所有していて、之をブラント教授の善処に委ねていたのである。そして、この書簡箋のスケッチは、諷刺画として画かれたものでないが故に、ここで比較のために非常に興味があるのであって、これらの中に、今度の諷刺画の騎手の容貌からさほど遠く離れていないように見えるスケッチが存するのである。鉤鼻をしたキヤケゴーアのスケッチや、アーチ型の鼻と後ろへ逃げた額のあるスケッチなどは、騎手のプロフィールがグロテスクな絵だという事を常に忘れないようにするなら、そんなに違ったものではないのである。かくして、ブラント教授の結論は、マールスドランは彼の騎手像によって、首と身体の間方ともにキヤケゴーアのグロテスクなドン・キホーテ諷刺画を画こうとした、という事が言えるように思われる、というのである。ヒエール・ハンセン氏とは反対に、ブラント教授は、マールスドランが諷刺画家として慈悲を有する者ではなかった、と考えるのである。

ブラント教授のこの示唆ある批判に対して、ヒエール・ハンセン牧師はデンマークの指導的キヤケゴーア研究者が、この新発見の神秘的な肖像画に就ての自分の分析を、本質的には認めた事に対して満足を表明すると共に、主要点に就て同じ紙上に返信を認める^{したた}のである。彼は聊か嫉妬しているように見える。

馬に乗ったソェヤン・キヤケゴーアに就ては、ブラント教授が疑いもなく大勝利を手に入れているのが分る、と牧師は言う。ヒエール・ハンセン氏は、ブロェクナーが目撃者だった典拠を知らなかった事を告白し、ブラント教授の報知はオェレンスレーガーがボルフスギャーゼのテニス練習で驚異的だったとか、ホーセー・アナーセンがホルステインボーアのゴルフトーナメントに出場していたとか、グロントヴィ閣下がフレゼリクスホルム運河でスケート滑走を練習した事がある、といった証言に我々が突然出合った場合と同じように、驚かされ又センセーショナルだった、と洒落ている。ブラント教授が又『序言』からの一節を引用して、キヤケゴーアが「乗馬という高貴な技術を全く知らなかったのではなかった」理由として挙げたのに対して、今度はヒエール・ハンセン氏も負けずに、専らキヤケゴーアの日誌からして、明かにキヤケゴーア自身の体験から出たと思われる騎手及び馬の世界に就ての多くの興味あり且つ特徴的な記述のある事を、指摘している。が何れにせよ、ブロェクナーの証言は、マールスドランが今我々に示してい

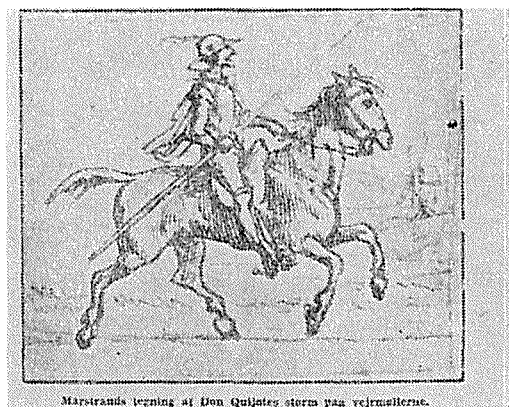
るのが、実際にキヤケゴーアであるという可能性を強める、というブラント教授の言葉が再認さるべきものとなる。

次には、神秘的イニシアルである。ブラント教授が、馬の鼻孔の右にある僅かに曲った線をSと見る事をせず、馬によく見られる鼻翼の輪郭に過ぎないとし、もしそれがSを示したものとするとするならば、寧ろもっと脊が低くならねばならぬ、と言った事に対して、ヒエール-ハンセン氏は御丁寧に、馬匹学者にして陸軍中佐であり有名なオリンピック騎手であると共に競馬審判員でもある所の F. Kirkeberg 氏と、馬の絵の専門家たる Sven Brasch 氏の2人の権威に、ブラント教授の判断を持ち込んで訴えたのである。前者は躊躇なく馬の鼻翼がキヤケゴーアのイニシアルを示しているものに違いないとした。所が後者の意見は全く反対で、マールスドランの画いている馬は、荒い鼻息を吹き、膨らんだ鼻孔をした若い烈しい駿馬であって、鼻口部に画かれた線は、ブラント教授の言うように、馬が強い鼻息を吹く時に顕著に見られる全く単純な鼻翼の輪郭だ、とするのである。ここに図らずもブラント教授は、敵の陣営中に強い同盟者を得た事になった。然しヒエール-ハンセン氏は、なをも執拗に自説を固守して、ブラント教授が決勝点へ乗り入れたとは言えない四つの根拠が相変らず存するとする。① 点のある場所が丁度ピリオドが置かれねばならぬ場所であるという事は、合理的には説明されない。そして、互に相並んでいる二つの「偶然性」を取扱うという事には警戒を要する。② マールスドランは、馬の首の解剖学的な細部に関して、Sven Brasch 氏と同じ馬匹学的洞察は明かに持っていなかった。なぜなら、もしそうだとするなら、マールスドランの描いた烈しい馬の他の絵に於ても、その同じ特徴が繰返されていなければならぬが、これまでヒエール-ハンセン氏が見た彼の馬の絵には、「鼻翼線」を示すようなものを見出す事は出来なかった。③ 類似のものが無いという事のほかに、この小さい線は正しくそれが曖昧だという事によって特色があるのである。なぜなら、もしもそれが隠されたS.と考えられるべきならば、それは口と鼻口部の間の溝を付けられた部分に持って来られた場合よりももっと錯覚を起させる場所があろうとは思われないからである。④ ヒエール-ハンセン氏は、Sが「寧ろ背を低くする」べきだという事を納得する事が出来ないのである。それは幾らか傾斜している、だが多くの人が普通に書くのよりも鋭い角をなしているのではない。そして、このような形に於てのみこの文字は、馬の首に於ける有り得べき解剖学的馬皮を見出す事が出来るのである。

とは言え、特別な専門的知識に従って、ブラント教授は競走の第一ラウンドでは事実リードをしているのを、ヒエール-ハンセン氏は認める。

右と關聯している風車翼の形はどうか。ヒエール-ハンセン氏は勿論、ブラント教授が風車翼

の奇妙な姿勢の中に隠されたKを見ようとする提案を受入れているのを、喜びを以て迎える。けれども、ブラント教授が更に進んで行って、「意味のない」そして「絵の中で何の働きもしていない」所の「宙に浮かんだ平行線」として「その上方の意味のない点」からiを読み取り、従って絵の中に Ki を見出している事にかけては、いかに空想の領国へ全速力で乗り入れたこの2人の騎手ではあっても、ヒエール-ハンセン騎手の方はもはやそこまでは従²いて行けないと悲鳴を挙げた。けれどもそれは彼に善意が缺けているのでも、空想に劣る所があるのでもなくて、「この著名な線」が風車の建物の構造に於ける一つの部分がスケッチされたものだと見る時に初めて、この絵の中で合理的な意味と働きを得るのだという知識を隠して置く興味に缺けているのだ、と言う。つまり、ヒエール-ハンセン氏はここでも又、建造物の歴史に就てのエキスパートたる Kai Uldall 氏に計った所（各種の専門家に診察を乞う便宜を持つというのが靈魂の医者の特権であるらしい）が、この「線」は、古いオランダ風車に於て風車の「帽子」を廻わしそしてそれによって風の方向に従って翼が回転するようにする所の棒のスケッチに当る事が知られたのである。ブラント騎手は少し出すぎたために、とうとう今度はヒエール-ハンセン騎手に尻尾を握られた形だ。こうなっては、ヒエール-ハンセン騎手が得意然として、風車翼の姿勢の中に S Ki の組み合されたイニシアルを見ようとする ブラント騎手の提議は、「書字法的に可能であるよりも寧ろ哲学的に器用」などと皮肉られても、致し方ない仕儀となって来る。



そして更に一段とヒエール-ハンセン氏を優位へ推し上げる要素をなすに到ったのは、Sven Brasch 氏を通じてこの論争の経過を知らしめられた Else Jøhncke 夫人が、ヒエール-ハンセン氏に対して、マールスドランの挿絵入りのセルバンテスの小説『ドン・キホーテ』の特別版を送って寄こした事によって、その47頁に見られるドンキホーテの絵は、^{くだん}件の諷刺画が真正のキャケゴーア肖像である

とする立証に、新たな強化を附与し、殆んど一挙にして、イニシアルの方向に於ける不確かで曖昧な補助策というものを余計なものとなし、これまでの一連の証明に於ける穴を密閉するに足る決定的な証言を与える事になるからである。二つの絵を比較して見れば分るように、両者に於ける馬具の類似は否定出来ないし、両者の人物のプロフィルの類似も顕著なものがある。ここに興味のある事は、最初例の諷刺画がキャケゴーアを示すものである事を全く斥けようとした Sven

Brasch 氏が、今^{もた}齊らされたドン・キホーテの絵に対せしめられた時、全く意見を変えて、これらの二つの絵の間には^{まご}紛う方ない類似が存するのだから、自分はヒエール・ハンセン氏の立場に口を挟もうとは考えない、そして、二つの馬の技術的な形成、絵の中でのそれらの同じプレースメント、同じ仕方で書き込まれた二つの孤立した風車、使用された描写技術、これら全ては二つの絵がほぼ同じ時期に画かれた事を暗示する、と述べたのである。之は experticie (専門家の権威ある鑑定) としてヒエール・ハンセン氏に取って強力な味方となった。

そして更に、今^{もた}齊らされたドン・キホーテの絵と件の諷刺画との間の差違の面をも詳細に吟味する事によって、本来の目標に向って重大な寄与の生ずる可能性が考えられる。ヒエール・ハンセン氏は先ず、2匹の馬或は同じ馬に於ける走り方に顕著な相異がある事を指摘する。然し彼は単に「ロシナンテは^{まご}正にギャロップに移ろうとしている」という事だけを述べるに止まっている。だが、この点は、或はこのヒントは、以下に述べるブラント教授の返信の中で、中心的な論点へと焦点が合わされて、本論争の決定的な帰結へと導かれる事になるのである。が、ヒエール・ハンセン氏はここでは寧ろ、風車の相違と、騎乗方向の相違、に関して彼の卓越した想像力を展開するのである。

水平に携えた槍を持った狂気の騎士が、今や襲撃せんとしている風車は、時代史的に完全に正しく「切株風車」(Stubmølle. 之は英語では post-mill, 独逸語では Bockmühle と言われる) として画かれていて、キャケゴーア諷刺画の方に於ける所謂「オランダ」風車とは違っている。このようなオランダ風車はコペンハーゲンでは幾らか壘壁 (Vold) に見られたものであった、特にクレスチアンスハウン壘壁で〔壘壁とは、勿論外敵に備えて往時作られたものだが、今日でも Vold の附く街路名は多い。クレスチアンスハウンは現コペンハーゲン東部地帯で、今日でも長い壘壁が残っている。画家 Hunæus の描く „København's Vold Aftenen før St. Bededag” (1862) という題の著名な絵には、Øster Vold を散歩する人々の向うに、オランダ風の Kastelsmølle が描かれている〕。所でヒエール・ハンセン氏はここでキャケゴーアの日誌の一節 (P.IV B37) を引合いに出すのである。其処でキャケゴーアは自分と J. L. Heiberg とを興った訓練を経た2匹の馬に^{なぞ}擬らえているのであって、ハイペーヤは訓教された儀式用の馬であるに対して、彼自身は若い荒馬で、その動きは美しくないかもしれぬがその代りに如何なる調教師も与え得ない燃えるような活力を持っているとするのだが、この同じ一節の中で、キャケゴーアは騎乗の行われる場所を述べて、「容易に事故の起りやすい壘壁とか非常に狭い地域以外に騎乗する場所を人が持たぬなら云々」と言っている。それで、マールスドランが、キャケゴーアが壘壁を馬で行くのを個人的に見た印象を思い出して画いたというのが、「圧倒的にありそうな」事だとヒエール・

ハンセン氏は述べるのである（マールスドランは一ブラント教授が指摘したように一プロェクナーの目撃談を知らなかったのだから）。

それから騎乗方向に就ては、槍を持ったドン・キホーテの方は正しく風車に向って突進しているが、キヤケゴージャ諷刺画の方ではキヤケゴージャは風車に背（湾曲した背）を向けて遁走しているように見える。そしてブラント教授がプロェクナーから引用したのと丁度同じような哀れな馬上姿勢を示している。ヒエール・ハンセン氏は騎乗方向に関してはただ右の如く述べて差異に注意を喚起するだけで、その意味を深く探ろうとしなかった（キヤケゴージャの馬術の下手さ加減をこの絵は示すものと彼は考えたのだろうか一例えば、キヤケゴージャが風車へ馬を進めようとしても馬が勝手に逆の方向に走ったとでもいうように）が、この点も後にブラント教授によって適切に補われる事になる。ヒエール・ハンセン氏はこの項に關聯しては寧ろ、2匹の馬の耳（鼻の間）に現れている拗けた状態は、馬に於て不安が初まっている事を知らせるものだという事を、Sven Brasch 氏から聞いた事として、注意している。そして、かくの如く馬そのものに関しては、2匹の馬の間にあらゆる類似がある一論議の花が咲いたSの形の鼻翼輪郭の最も微かな暗示そのものを除いて、と言っている。

次に、騎手の姿に関しては、ヒエール・ハンセン氏は、ブラント教授が彼のさきの論文に挿入した所の、マールスドラン画く鉤鼻のキヤケゴージャ（筆者のこの論文中にはそれを再現する事は出来なかった）を、知らなかったのであって、全く驚かされた事を告白する。そして、ヒエール・ハンセン氏が前に述べたキヤケゴージャの身体にドン・キホーテの首を載せた仮定は、必要ではない、或は少くとも唯一の可能性ではない、とブラント教授が論ずる充分な理由のある事を認める。然し、ブラント教授が詳細に論じたのだが（筆者のこの論文ではそれを省かざるを得なかった）、マールスドランはキヤケゴージャの顔面の特徴に関して屢々不確実さを感じ、そのスケッチを1回1回試行して行って、今日我々が一定の特徴だと認める結果に到達したのであった。それだから、もしマールスドランがキヤケゴージャに対する畏敬の念から（ヒエール・ハンセン氏はブラント教授の論及にも拘らず、この考えを棄てようとしなない）、キヤケゴージャに部分的にマスクを掛けようとするなら、諷刺画の一般的法則に従って、ドン・キホーテ風に、鼻筋の曲りと額の後方湾曲を誇張しさえすればよかったのである。が、何れにせよ、ブラント教授のなした騎手の顔に関する説明は、件の絵が実際にキヤケゴージャをドン・キホーテとして示しているという事を、一層真実なものとしているのに外ならないのであり、又、ヒエール・ハンセン氏の分析に於ける最も重要な特徴たる点、即ち身体がキヤケゴージャの形姿の伝統的な見力と正確に合致しているという主張に就いては、ブラント教授が全面的に賛意を述べているのを、ヒエール・ハンセン氏は

真実に満足に感ずる旨を断言している。

ただ、ブラント教授の詳細な論文の中にも、ヒエール・ハンセン氏がなしたマールスドランの作画時期に関する提案に対しては何らの態度も取られていないのが淋しい、と後者は述べる。前述の如く、この絵はこれまで知られている全てのマールスドランのキヤケゴーアスケッチとは違って、キヤケゴーアの生存時、とりわけ教会闘争時の1855年、に出来たものと考えようとしたのだが、ヒエール・ハンセン氏のこの考えは、彼にその後示されたマールスドランのドン・キホーテの先の絵と比較する事によって、確かめられるのではないかと彼はするのである。もしもセルバンテスの『ドン・キホーテ』へのこの挿画が1850年—1870年の時期の間に出来たのなら、奇異・狂気のスペイン人の風車小屋への襲撃 = 悲劇的・天才的デンマーク人の教会への襲撃、という観念聯合として結び付けられて、二つの絵の間には多分連結が考えられるだろう（なお前述の Sven Brasch 氏の言葉を参照）、と。

結びの言葉としてヒエール・ハンセン氏は言う、もし又別の出没する獲物が深い森の奥から狩り出されるような事があるなら、自分がそれをば、当国宮廷狩猟長、又の名は哲学教授フリチオフ・ブラント博士との共同作業に供するのは、自分の喜びとする所でござろう。犬どもが既に遠くで吠えている。いざ馬に！

論争の最後をブラント教授の返信が飾る。前回にヒエール・ハンセン氏が発表したマールスドランの「真正の」ドン・キホーテは最も興味あるものなる事を述べた後、ブラント教授はこの論文では中心問題として、「マールスドランが何故キヤケゴーアをドン・キホーテとして描出したか？」換言すれば「何がマールスドランをしてこの絵を画くようにインスパイヤーしたか？」を考えて見ようとするのだが、その前に、問題となった風車及びその中に見得べきイニシアルに就て簡単に触れるのである。

その思考と構想に於ても、又表現に於ても、清新さと活力の豊かに溢れたこの稀な論争の展開に対して、読者の側から熱狂的な関心が寄せられたのは当然であった。3人の見知らぬ読者から別々に、マールスドランの画いたオランダ風車の荒いスケッチを再構成して輪郭をはっきりさせた絵を、ブラント教授は受取った。もしこの絵が正しいとするなら、風車の右側に宙に浮んだ線とその上の点は、風車の舵繩の残存物である。更に、風車翼は強い側面パースペクティブで見られたものと考えられねばならぬ事が分る。だが風車小屋がリアスティックに再現されていないと思われる事は変らないのであって、風車翼の×と風車小屋の背後に突出している舵柄の間に、どう見ても正しい関係は存しないのである。それから又不思議な事には、マールスドランは現に

ある以上に風車小屋を細かく画^{こま}かななかったが、騎手の姿自体や、それからドン・キホーテの絵の方の切株風車の方は完全に詳描されている。このような理由から、マールスドランは、キャケゴージャ諷刺画の風車小屋を簡単なスケッチのままにして置く事によって、ラフな線を SK というモノグラム (i をも伴って) のために利用した、という事がやはり可能な事と思われる、とブラント教授は述べて、風車の中での彼の SKi 判読に恋々たるものがある。だが、イニシアルのあり得べき密輸入という問題は、この絵がキャケゴージャを表わしているという事に就て、他の方途により充分納得の行く仕方^やで論議出来ない時にのみ、興味があるのだから、この最も疑わしくて曖昧な事は止めに^やする、と彼は逃げている。それよりもこの論文では、真性決定のために今一つ小さな寄附をなす事が出来るとして、次に、マールスドランは何故にキャケゴージャをドン・キホーテとして表わしたか? の問題の究明に移るのである。

この問題は、然し乍ら、その内容から言えば、これまでに既に提起されていない問題なのではなくて、ヒエール・ハンセン氏がこういう形の問題としてではないが、然しマールスドランの作画時期に関する提案として最初の論文に於て既に提起し且つブラント教授がそれに対して何らの態度決定をもなさぬのを第二の彼の論文で託^{かこ}った所のものである。ブラント教授は今それに対して一層一般的な立場から答え且つ批判を加えようとするのである。初めにヒエール・ハンセン氏が理解した形としては、マールスドランが彼の絵によって考えたキャケゴージャは1855年の教会襲撃者ソェヤン・キャケゴージャである、という主張としてであった。そしてマールスドランは正常な教会人として、当時の教養階級と共通の所見を持っていたのであって、つまり、キャケゴージャの国民教会に対する撃突は、半狂乱の空想家が風車に対してやる悲喜劇的な闘争であり、之がマールスドランにキャケゴージャをドン・キホーテとして表わそうとする考えを与えた、というのがヒエール・ハンセン氏の挙げる理由であった。

ブラント教授によれば、ヒエール・ハンセン氏のこの理解は、自然でもあり尤もでもあるが、それだからと言って正しいという事にはならないのである。教授はヒエール・ハンセン氏の理解がこの絵に適合しているだろうかという小さな喘息^か的疑い(キャケゴージャの言うだろう如く)を持つというのである。つまり、ブラント教授としては絵の中に何らの闘争的なものや少しの攻撃的なものを見出さなければならず、ドン・キホーテとしてのキャケゴージャが馬に乗って去って行くのも奇妙な事だと思う、というのである。絵の中にもしも小さな風車小屋がなかったなら、誰も闘争しているドン・キホーテには思い到らないで、ただ奇妙な男、身体の湾曲と面相が奇妙で空想家のような様子の男が、烈しい馬に乗って田舎の方を走っているのを見るだけで、(然り、それは彼の1人の男、^か「その男は家庭に厭きて、馬に乗って遠くへ去ろうとした。彼が少しの道の

りを来た時、馬が躓いて彼は落馬した。そして彼が立ち上がった時、自分の家庭を打見るに到ったが、それは今や彼に対して非常に美しく思われたので、彼は直ちに馬に跨って家に帰り、家庭に留った。」(P. II A233) 所のあの男を見るだけかもしれないと筆者も思う)、それだから、ヒエール・ハンセン氏の理解の外に、別の可能性が論じられると信ずる、と教授はする。かくして、教授は次に、嘗て彼がその著『若きソエーヤン・キャケゴーア』に於て、縦横に駆使した探偵的嗅覚と巧緻な解読力を、ここでも再び発揮しようというのである。

主論点を先きに述べると、キャケゴーアは1845年に自らをドン・キホーテと比較したのである。即ち、『人生行路の諸段階』に於けるフラター・タキトゥァヌスの心理学的実験たる「罪ありや？一罪なきや？」に於て、フラター・タキトゥァヌスは「苦悩の物語り」（之はキャケゴーア自身の婚約のいきさつが基礎にされているのは周知の通り）の男性像たる恋する者の立ち入った分析をするのだが、フラターはこの男性をば、狂った者として、或は半ば狂った者として、特徴づけ、そして明白にドン・キホーテと等置するのである。フラターによれば、この恋する者の狂った所は、乙女の対する彼の愛情の浪漫的な形にあるのである。あらゆる浪漫的な熱狂的な話し方—その頃の他の恋する者にとって^{まき}は正しく話し方に過ぎないもののだが—は、この主人公たる男にとっては大真面目だったのである。だから彼は、不幸な恋する者として、稀な存在なのである、支那繻子のコートのように。さて、知られた如く、ドン・キホーテは自分が放浪の騎士だと信じた。けれども、かく考えたという点に彼の狂気が頂点に達したのではない。セルヴァンテスはもっと深慮があった。ドン・キホーテが病氣から恢復した時に、得業士 (Licenciado) は彼の正気を試そうとして、彼と種々の事を語る内、突然、モール人がスペインに侵入したと告げた。ドン・キホーテはスペインを救う唯一の方法があるというのだが、その彼の秘密はスペイン国王にのみ明そうとする。最後に、得業士の要請により懺悔憎との厳粛な沈黙の誓いの下に、彼の有名な騎士の告白をする。即ち、唯一の方法とは、国王陛下が全ての放浪の騎士に招集の令を出し給う事である、と。放浪の騎士であるという事が既に半狂乱の男の業だが、スペイン全体に放浪の騎士を住まわせているというのは、真実、熱狂性精神錯乱である。この点を考えて見れば、彼の恋する男はずっと分別がある、なぜなら、彼自身は不幸な恋の唯一人の騎士になる、という風に時代を理解したのだから (S. V. VI 421ff. cf.). だが又、この恋する者としていたましい主人公は、「恋する者として」(qua Elsker)、彼がそのような立場を取る場合よりも以上に、いたましい風貌の彼の^か不滅の騎士に似ている場合はない (op. cit. 420f. cf.) のである。

苦悩の物語りを体験する浪漫的恋慕者たる男性と、苦悩の物語りを書いている平静な客観的観察者たるフラター・タキトゥァヌスは、共にキャケゴーア自身の軽い詩化である事を、キャケゴ

ー自身意識していたであろうが、右の敘述に於て、キヤケゴーアは自らを、ドン・キホーテとして、つまり、その「恋する者」という特性に於て、特徴づけているのである。即ち、ドン・キホーテ的であるという事、ドン・キホーテの狂乱という事を、「恋する者」の、普遍的エトスを遊離した恋愛の真剣さに、擬しているという事が言えるだろう。

このようにして、ブラント教授の理解する所によれば、右に挙げた『諸段階』に於けるキヤケゴーアの敘述が、恐らくマールスドランがキヤケゴーアをドン・キホーテとして画くに到ったインスピレーションを与えたのだろうとするのである。その様な場合には、マールスドランはキヤケゴーアの言葉を端的に言葉通りに取った事になるが、ここでブラント教授は、諷刺画家というものは一般にその犠牲者の言葉を真に受けるものだという事を、種々の例を挙げて示す事によって、マールスドランの場合の妥当性を帰納しようとして、再び蘊蓄を傾けている。既にブラント教授の前回の論文に述べられてあったように、「コルサール」画家 クレズドルップは、馬に乗ったキヤケゴーアの絵を、『序言』（1844年）に於けるキヤケゴーアの言葉にインスパイヤーされて画いたのだった。画家ゾイテン（Christian Olavius Zeuthen, 1812—1890）も、1843年に画いたキヤケゴーアの諷刺的な油絵スケッチで、丁度同じ事をやっている、この絵はフレゼリクスボーア博物館に保存されて居り、Kafé D'Angle-Terre（コペンハーゲンの中央部 Kongens Nytorv にあって、今日では一流のホテルになっている）に於けるキヤケゴーアが画かれているのだが、彼の四肢、身体の様子が余り不釣合なので、Rikard Magnussen は不思議に思った。けれども、キヤケゴーアの長い脚と短い腕は全く異常なものだったのであって、キヤケゴーアが立ち上がると約4アレンはあっただろう（とブラント教授は書いているが、1 Alen=ca. 0.627m だから、少し高過ぎはしないか？）、彼自身『これか—あれか』の中で「私の骨組の不均衡」に就て書いて、「私のはオーストラリアのカンガルーのようにひどく短い前肢〔膝から上〕だが、極まりもなく長い後肢だ」と言い、動き出すと巨大な跳躍になると述べている（S. V. I 22 cf.）。だから、ゾイテンは端的にキヤケゴーアをば大きなカンガルーの姿で諷刺したわけである。このように、諷刺画家は確かなそして具体的な出発点を、犠牲そのものの内に持つものである。マールスドランに於ても、彼の諷刺画の多くのもの、恐らくは大部分のものは、文学的にインスパイヤーされたものである。

で、目下の場合に於ても、件の絵はマールスドラスが『諸段階』の叙述によってインスパイヤーされた結果だとするなら、ヒエール・ハンセン氏の解釈とは違った見地が生ずる事になる。即ち、烈しい速足で出放題に走らせて行くキヤケゴーアは、ずっと後年の1855年の教会襲撃者ではなくて、彼が自分自身を1845年の「罪ありや？—罪なきや？」に於て描いたような、浪漫的に恋に

陥った半狂乱のキヤケゴーア、である事となる。ドン・キホーテが彼のドゥルシネア (Dulcinea) を持っていた如く、ソエーヤン・キヤケゴーアは彼のレギーネを持っていたのだ。恐らく此処に、この絵の基礎になっている共通点があるだろう。だから、風車は、又単にドン・キホーテという範疇を暗示するに過ぎない附加物なのであり、だから、キヤケゴーアは風車から離れ去って騎乗しているのであり、或はもっと正確に言えば、風車は無視されて居り、この絵の主題には入っていないのである。

だが、このような理解が主張されるためには、マールスドランが「罪ありや？一罪なきや？」を読んだという事が、前提されていなければならない。この事に就ては、ブラント教授は何も知らない、と言うのである。けれども、間違いなく言える事は、『諸段階』は当時の精神的な関心を持っている全ての人によって読まれ、『誘惑者の日記』と並んで『罪ありや？一罪なきや？』は、最もよく読まれた本であるのは確かである。『罪ありや？一罪なきや？』は、キヤケゴーアが自分自身のみならず彼の以前の愛人を組上に載せていると言われたスキャンダルブックだった。そして、たとい当時の人が之を、この本自体を読んで居らずとも、モェラー (P. L. Møller) の批評や「コルサール」の注釈などから、それを直ぐに知り得たのだった。即ち、1845年4月に出た『諸段階』に対して、モェラーは同年12月発刊の彼の年誌ゲア (Gæa) の中で、特に「罪ありや？一罪なきや？」に向って、彼の悪評高き批評をやった。その一節にこの本の内容を述べて、「惚れ込み一婚約一変節の歴史」である事を揶揄して、人格を失った「この本の著者は、恰かも、得業士 (セルバンテスの小説の中の) が自分はガラスから出来ていると信じ、粉々に壊れないように、フラスコみたいに薬に包んでもらったのと同じように、自分自身にすっかり透明になった云々」と言われている。ここでセルバンテスが触れられている、尤も、ドン・キホーテではなくて、得業士だが。そして、周知の如くキヤケゴーアはこの批評に対して苛責なき反撃を加えたために、モェラーは「壊滅させられた」のだった。だがその代りに「コルサール」による死苦がキヤケゴーアを待っていたのだ。キヤケゴーアのこの反撃文(「祖国」紙上で)の中に、やはり「セルバンテスと得業士」の名が挙げられている(この事からしてブラント教授は、少し横道に外れるが、件のマールスドランの絵が、セルバンテスの得業士としてのキヤケゴーアを表わしている事がなかろうか、研究を要する、と注意を喚起している)。

それはそうとして、マールスドランがキヤケゴーアの『諸段階』の叙述を知って彼をドン・キホーテとして画いたかもしれぬ事を予想させる顕著な事実があるのである。マールスドランは、『諸段階』が出刊された1845年4月にはコペンハーゲンに居た、然し彼は1845年9月に南へ旅立ち、帰国したのは1848年夏であった。だから彼は、モェラーとキヤケゴーアの衝突の時にも、又

キャケゴーアに対する「コルサール」の攻撃が最も烈しかった1846年の前半にも、デンマークには居なかったのである。けれども、「ゲア」も「祖国」も「コルサール」も、ローマに於けるデンマーク芸術家の居留地区で読めた事は確かである。このようにして、もしマールスドランがコペンハーゲンに居たとしたなら分らなかっただろう事が、彼がイタリアに居た為に却って判明して来るのである。即ち、カール・マズセンによれば (Karl Madsen: Wilhelm Marstrand, 1905, p. 146—155), マールスドランがシシリア島のパレルモに於て初めてドン・キホーテ - モティーフに着手したのは1846年の夏だったのである。この時点は正しく、マールスドランが『諸段階』の出版 (1845・4) によるキャケゴーア自身の叙述か、或は「ゲア」(1845・12) に於けるモェラーの言葉か、或はそれ以後の「コルサール」の攻撃に於けるその種々の諷刺的注解か、の何れかを知って、その直後の印象によってインスパイヤーされたとの仮定に、合致するものである。

もし人が、マールスドランのドン・キホーテ - モティーフによる全ての絵を詳細に研究する事によって、ドン・キホーテとしてのキャケゴーアの絵がその中に正しく挿入される年代表を作り得るなら、興味深い事であろう、そして、もしこのキャケゴーアの絵が1855年以前のものであるなら、マールスドランは教会襲撃者としてのキャケゴーアを考えたのではない事になる。なお又、ブラント教授は一つの思い付きとして述べるのだが、これら二つのドン・キホーテの絵は、マールスドランによって一対として考えられたのではなかろうかという疑いも生ずる。二つの絵はほぼ同じ形式のものであり、馬と騎手は同じ大きさのように見える。鉄兜と槍を持った古えのドン・キホーテが、乗馬帽を被って槍を持たぬ近代のドン・キホーテと対しているのである。マールスドランが描いた所の、街を逍遙するキャケゴーアの有名な全身像は、マールスドランの描いた宮廷牧師 Balthaser Müller の諷刺画と一対をなすものである。人は一度やった事は何回もやるものだ。

ブラント教授は最後に、ここに行われたよい論議に対して感謝し、それが多くの点でこの問題を解明したと思うが、何らかの積極的な確実性には達しなかった、そしてそれは決して達せられるものではない、だが人は可能性によってそれを取巻いて、真らしさを強める事は出来る、と結んでいる、もし新しい契機が現れたらいつでも自分は貴殿のお役に立ちたいというヒエール - ハンセン氏への挨拶を添えて。

以上でこの特異な論争は終る。ブラント教授はやはりその専門的な力量を発揮して、キャケゴーア熟知の深さを示した。そしてキャケゴーアの著作解釈にかけては、ヒエール - ハンセン氏を引離したかに見える。然しヒエール - ハンセン氏もまた、その卓越した感覚と熱意によって宝庫

に分け入り，よくこの得難い資料を探索したのであった．顧れば，ここに現れている論議のやり取りは，多分にデンマーク人のユーモラスな面を表わす一例とも言えるのだが，然し又同時に，デンマーク人にしか出来ないキャケゴーア学への大切な寄与でもあるのである．筆者自身，こんなに興味深い論争に出くわしたのは初めてで，つい筆が滑って自分の考えを過分に入り込ませたかもしれないと思っている．